



お
ぢ
な
ぢ
な
ぢ
な
ぢ
な
ぢ

|||

ル

ク

著：雑兵
画：些細

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止



おぢぢぢ
おぢぢぢ

ニ

ニ

ニ



両腕を組んでぐぐーっと伸びをした。
胸を張り、突き出すように、触りやすいように……

「……………」

そこまでするつもりはなかった。

ちよつとだけ、表面をさらりと撫でてやるだけ……

ところがそこで郁子がよりによって背伸びをしたのだ。

制服をみちみちに張り詰めさせている胸を突き出すように。

後ろからでも背中中の輪郭からはみ出て見える果実がゆさ
ん、と揺れる。

そこまでするつもりは、なかったのだ。

ただ、どうぞ揉んでくださいみたいな動きをするものだ
から……。

がばっ

ぐにゅんっ

翔太の五本の指が深々と郁子の乳房に食い込んだ。



「あーあー、昨日の晩あんなに搾りまくってやったのに
もうこんなに溜め込んじゃまってまあ……」

茶化すように腰に手を添えて揺すぶられると肉の房もゆ
らんゆらんと揺れる。

「う、うっさいわね、あんたの搾り方がうますぎんによ
……」

羞恥で真っ赤になりながら恨み言になってない恨み言を
言う。

昨日、ではなく昨晚の晩、という言い方がいやらしい。
つまり日課で行っている朝の搾乳ではなく、昨夜のベッ
ドの上での事を指して言っている。

「まあまあそんなだけ優秀ってことだ、それより気張らな
いとまあた朝っぱらからイキまくる事になるぜ？」

「そ、そんなに簡単にイかないわよ！」

「へえ」

我ながらなんとまあ見え透いた負け惜しみだろうか、彼
の手に耐えられた事なんて一度たりともないくせに。

そもそも口調と表情が全然合っていない、目にハートでも
浮かびそうに媚びた表情をして、早く搾って欲しそうに
胸と尻をふりふり揺らして……

「じゃ、耐えてみなよ」



「は、あ、おっ」

ぶぢゅるっ

「んおっ」

ぶぢゅるっ

「おっ……」

どぶぢゅるっあううううぶしゅるっあうううう

「おっ、おっ、おっ、おあっ、んあっ、あおっ、おっ」

強烈な開放感、乳房に充満していた熱が放出されていく、変な声が止まらない、快感も。

「おうううっあううううっ、翔太あっ」

何故か翔太の名前を呼んでいた。



自分の飲んでいるものがただの牛乳でないことはすぐに
わかった。

どちらかというところとヨーグルトに近い僅かなとろみ。

しかし牛乳ともヨーグルトとも違う濃厚で喉に絡みつく
ような味わい。

それだけ濃いのに爽やかさを感じるほどにぐんぐんと喉
を通る。

そして、僅かに感じる違和感。

(何だ……これ……?何か……?)

どくん、どくと鼓動が早まり、体が急速に熱をもち始
めた。ついでに下半身にも熱をもち始める。

まるで度数の高いアルコールを一气飲みしているかのよ
うだ。

それも当然の症状である。

翔太にはわかりようもないが今翔太が飲んでいるのはホ
ルミルク。

しかも、通常のホルミルクではない。



そうだったらもうどうしようもなかった、無条件降伏だった。

まさしく郁子の乳房は翔太相手に対しては最大の弱点だった。

(勝てないよお……!)

つまり、自分は体の中で最も弱くて脆い部分を体の正面から翔太に向けて常に剥き出しにしているということだ。どうぞいつでも好きなようにいじめて下さいと言わんばかりにゆさゆさ揺らして。

(あたしの体あ……これじゃ翔太の玩具じゃんかあ……ヘンタイだよお……!そ、そんなの……)

「あきやああうっ!」

海老のように体を曲げながら、耐えかねたように翔太の頭をかき抱く。

(ヤラしすぎるよおおお)

ずじゆるるるる!

一際激しく吸い上げた後、翔太が顔を上げる、口元に白いミルクの跡が残っている。



郁子は口を半開きにして翔太の体と……下半身に見入る。

（あ、あ、あ、あんなの付いてて邪魔にならないの！？いや、普段は萎んでるんだっけ！？なんか、早く入れさせろって怒ってるみたい！そんなに？そんなにあたしとしかかった？そんなに我慢してた？）

同時にひや、と小さく悲鳴を上げてしまう。

ずぐん、と下腹部が自分でも驚く程に脈動し、また新たな蜜が溢れ出てしまった。

明らかに翔太のソレを見て体が反応したのだ、恥ずかしい。

ぎし、と翔太がベッドに上がってくる、いつものおちやらけた表情から想像できないほどに余裕のない顔をしている。

やっぱりちよつと怖いけど、それだけ自分が翔太の理性を飛ばしているのだと思うと嬉しくも感じる。

と、伸びてきた翔太の手が郁子の両足を掴んでぐい、と開かせる。

「きゃ！」

思わず手でそこを隠すが、翔太は素早く足の間で体を割り込ませて閉じれなくするとその手を引き剥がす。



「ひいええ、ちよつ、見ないで見ないで」

「見なきゃできねえ……すげえな」

「わあー！言うなあ！」

唯一身につけているパンツはもはや取り繕いようのない状態になっている、それを目にした翔太は興奮で息が詰まりそうな状態になっている。

「触るぞ」

「えっ、えっ」

ねちやつ

男と女の最も違う部分であり、童貞が最も気になるその湿った部分に濡れて変色した布越しに指で触れた。

ぐんっ

「ぐっ!？」

途端、郁子の足がすごい力で翔太の腰を挟み込んだ。思わず呻く。

「しよ、しよ、しよ、しよこは、慣れてない、デリケートだから、デリケート、だからあ」

前述の通り、郁子は自慰の時にも弄るのはもっぱら胸であり、そこは殆ど手付かずだ。余計に刺激に慣れていない。

「そうか」



(どっかいつちやえ、理性どっかいつちやえいつちやえ、あ、これあたしのファーストじゃん……おいし……)
自分でも驚く程自然に舌を滑り込ませ、翔太の舌を絡めとっていた。
ふっん、とまた翔太の目から理性が失われる。

口で翔太を味わいながらも両手は自分の下着をずらし、翔太の昂ぶりにそつと手を添えて軌道を調整する。処女とは思えないスムーズな手際は魔物娘の本能。想定通り、再び獣欲に支配された翔太は本能のまま思い切り腰を突き出す。
軌道調整は完璧だった。みち、と、儂い抵抗は容易く突き破られる。
ござんっ

「んぐっ」

郁子は腹に熱い芯が通るのを感じると同時にがっちりと足で腰を、腕で頭をホールドし、全身でぴったりと翔太に密着した。

「……………?!?!?!?!?!」

翔太は困惑した。

(う、う、う、動いて……………!?)

腰は動いていない、にも関わらず自分の陰茎を包む肉はうねるような複雑な動きをしている。気持ちいい、というレベルではない。

語るまでもなく、魔物娘の膣構造は男にとっては「凶悪」の一言である。

中に出してはいけない、とか、離れなきや、などとは頭に浮かぶ暇もなかった。

ただ強く抱きしめてくる郁子と口でも貪り合いながら、しっかりと腰を突き出して、相手の一番奥に。

びゅぐんっ

「じゅ、る」

熱いものを腹の奥に受けた郁子の腰がぐぐつとブリッジをするように浮き上がる。

「んん、ん、ん」

腰が浮いた事で侵入角が変わり、愛撫が変化する。





にゅぷ……にゅぷ……ぬぷ……

「ん？何でも……ないよ、のんびりしてるだけっ……え

え……」

くちゅ……ぬちゅ……

「ご、ごはん、ちゃんと、うん、わかってる、え？う

ん、うっ……うっ……」

ぴちやくちゅ、ずちゅ……

「音お？うん、何の？はっ……料理、してるの、料理、

え？いや、のんびり料理してん、の」

ぱちゅ、くちゅ、ずっ……

「え？お父さん？……あ、あは、あハア、うん、あの、

ごめんね？いや、あの、ね、何か、いろいろ、ね？ごめ

んね？」

ござんっ

「んおっ……」

どくっ どくっ どくっ びゅくっ……びゅくっ……

「……ご、ごめ、おなべ、お鍋、吹いてるから、か

らあ、また後でね？」

魔物娘図鑑・ホルスタウロス

ミノタウロス種 獣人型

- 生息地……………草原、人里
- 気性……………おっとり、献身的
- 食料……………雑食、主に草を好む



牛の特徴と、白と黒の特徴的な体毛を持つ、獣人型の魔物。

ミノタウロスの亜種で、進化の過程で凶暴性が薄れ、人間に従って生きる道を選んだもの達である。

ミノタウロスと異なり、おとなしい性格で人を襲う事は少ない。

だが、ミノタウロスと同様、深く考えるのは苦手で、ぼんやりしている事が多く、食事や性交を行う時以外は眠っている事がほとんどである。

野生のホルスタウロスは、まず自分の主人となる人間の男性を探し気に入った男性が見つかり、その男性と共に人里やその近辺で生活する。

主人になった男性に対して、しばしばその巨大な胸を押し付けるがこれは彼女たちの愛情表現であり、この際に胸を揉んでやると彼女たちの愛情表現に応えた事になり、非常に喜ばれる。

胸を押し付ける際、一際強く押し付けてきた場合は交わりたいという意思表示である。彼女たちは基本的に主人の意思を尊重するため、無視しても構わないが、あまり無視し続けると、やがて我慢の限界に達し、凶暴化してしまうという。

こうなった彼女たちは、主人に襲い掛かり、その溜まりに溜まった性欲をすべて発散させるまで大人しくなる事はない。

彼女たちもミノタウロス同様、赤い色を見続けると興奮してしまう。

興奮した彼女たちは、魔物としての本性を思い出したかのように、しばらくの間凶暴化する。その間の気性は、まるで原種の「ミノタウロス」のようであるという。

また、彼女たちから採取できるミルクは、味、栄養ともに一級品な上精力増強効果もあり、人間、魔物問わずに需要が高く、活発に取引が行われている。

※魔物娘図鑑より転載

ゲストイラスト：
鬼天狗さま



健康
ク回ス

ホルスタウロス服
郁子ちゃん



Master Girl Encyclopedia Stories
Case: *Holstaur*



OSANANAJI-MILK